

## 学 位 論 文 要 旨

研究題目 (注：欧文の場合は、括弧書きで和文も記入すること)

Factors for inhibition of early discharge from the psychiatric emergency ward for elderly patients

(高齢者精神科救急治療病棟において早期退院を阻害する因子)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学 専攻 環境病態制御 系

公衆衛生 学 (指導教授 島 正之)

氏 名 足立 祥

【背景】 高齢化に伴い、精神科領域における高齢者患者の数は増加している。認知症をはじめ、気分障害、高齢化した統合失調症など、老年期における精神科領域の疾病は多彩である。高齢者精神科領域においても急性期化や早期退院が必要とされているが、救急に特化して対応できる病棟を持つ施設は少なく、一般精神科病棟に比べ入院期間が長くなる傾向がある。本研究では、日本でも数少ない、高齢者精神科救急を専門とする病棟において、早期退院を阻害する因子を検討した。

【方法】 神戸市の精神科病院において、2015年5月～2016年4月の間に高齢者精神科救急病棟に入院した患者208名を対象とした。3か月以内に自宅、施設に退院した群を「早期退院群」、3か月以内に退院できなかつた群及び3か月以内であっても他病院への転院または死亡退院した群を「非早期退院群」とした。入院時の年齢、Body mass index (BMI)等の基本情報、血清アルブミン値 (ALB) やC反応蛋白値 (CRP)等の生化学検査の結果、Mini Mental State Examination等の心理検査、入院中の行動制限の使用等を含む、24因子について両群間の比較を行った。また、非早期退院と関連因子との関係との関係を調べるために多重ロジスティック回帰分析を行った。

【結果】 対象患者208名の平均年齢(±SD)は79.1(±7.8)歳であった。ICD-10に基づく主病名はF0群「症状性を含む器質性精神障害」が74.0%と最も多かつた。非早期退院群において、BMIおよびALBが有意に低く、CRPが0.5mg/dL以上の割合や、入院中に隔離・拘束が使用された割合が有意に高かつた。多変量解析の結果では、非早期退院に有意に関連する因子は入院時のBMI  $\leq 17.5$  kg/m<sup>2</sup> (オッズ比(OR): 2.41 [95%信頼区間(CI): 1.06-5.46])、ALB  $\leq 30$  g/L (OR: 3.78 [95% CI: 1.28-11.16])、隔離・拘束の使用 (OR: 3.78 [95% CI: 1.53-9.37])であった。また、BMI  $\leq 17.5$  kg/m<sup>2</sup>、ALB  $\leq 30$  g/L、CRP  $> 0.5$  mg/dLの3因子を入院時リスク因子と設定し、年齢及び入院中の隔離・拘束の使用を調整したところ、リスク因子のない者に対して、2つの因子がある者はOR: 5.11 [95% CI: 1.81-14.40]、3つではOR: 11.63 [95% CI: 1.06-127.55]と、リスク保有数が増えると非早期退院となるオッズ比が大きくなり、早期退院が阻害される傾向が認められた。

【結語】 高齢者精神科領域において早期退院を阻害する因子を検討し、複数の因子を同定した。入院時のリスク因子保有数が多いほど早期退院が阻害されることが示された。さらに、低栄養状態に対する介入や予防により早期退院を促進できる可能性が示唆された。